

# 国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾 ニュース

「当時のことで覚えてるなかで、象徴的なことって何かない？」

前号のつづき、今回でラストになります。

私が、当時の人権学習の取り組みについて尋ねると。

学級通信みたいなものを出してくれて、あれで一回まとめられてた。こんなことあったんだとか。私は結構文字で見るほうだから、それがすごく理解しやすかった。あの時あんなことがあって、こんなふうになったんだみたいなのが。断片的だけど、それで全体的に覚えてる感じ。

この子たちの年から、私はよく「書く」ようになりました。当時はまだ記録する程度だったのですが、この年から、「人権だより」や「学級だより」を毎年書くようになっていきます。それは、その年を生きた私の記録であり、証でした。「何をしたかよく分からない1年」ではなく、「これをした1年だった」と思えるように、記録をはじめたのです。でもそれが、「文字優位」の子どもたちには、有効だったのです。

今の子どもたちは本を読まないと言われます。だからと、学校の取り組みとして絵本の読み聞かせをしていたりもします。けど、自分たちの身のまわりに起こった出来事や、そのとき感じた同級生の感想を、「おさらい」のように文字を通して読むことを、子どもたちは苦にしません。むしろ嬉しそうに、喜んで、私が音読するよりも早く読み進めていきます。それはそうです。自分の、自分たちのことなのですから。そしてそのなかで、字を学んだり、言葉を覚えたりしていきます。それが毎週のように1年間続けられればどうでしょう。立派に1冊の本を読みきったのと同じではないでしょうか。

今、学年人権だよりを、すべてのクラスで担任の先生に音読してもらっています。すると異口同音に、どの子どもちゃんと読んでいる、裏面にひっくり返すサツという音まで同じタイミングでうれしくなる、と言います。今の子どもたちは、本は苦手かもしれません。でも、みんなで読むことは、決して嫌いではないではないのだと思います。最後に彼女にこう問いかけました。

「全体学習(みんな語り合う人権学習)にみんなは何を求めてたのだろうか？」

何を求めて全体学習をしたのかはこっちが訊きたい。

必死だったんだろうなということは伝わってた。だから必死になれた。先生が「対等」に降りてきてくれたことが大きかった。他のこと(教科学習、生徒指導、部活動、進路指導)は、教員側の姿勢として上から指導みたいな感じ。だけど、人間対人間のつき合いとして向き合ってくれたから、向き合おうとしたと思うから、それが人権教育だから分かりやすかったんだと思う。人権教育には正解があるようでないから。「お前なんか何も分からないから教えてやるぞ」みたいな感じだったら、人権教育でも反発してたのかもしれない。

この、「対等」というワードは大きな鍵と感じました。

人権学習を進めていくと、何が正解で何が間違いなのか分からなくなることがよくあります。そこでみんなが悩み果てるのですが、その悩み果てることが大切なのではないかと思います。そこで上から、「これが正解だ!」と言われることの違和感。教師も生徒も、大人も子どもも関係なく、共に悩みながら、共に歩んでいるという感覚が、互いをリスペクトすることにつながっていくように思います。つまり、互いの信頼関係を築いていくのだと思います。教育において、信頼関係は生命線です。それなくしては成立しません。それが、人権教育にはあるということです。

彼女への聞き取りはこうして終わりました。そのなかには、私が感じていたこととビックリするくらい同じこともあれば、私が気づいていなかったこともたくさんあり、多くのことを学ばせてもらう時間となりました。と同時に、「みんなで語り合う人権学習」の意義をさらに深く理解することになりました。

本気の人権学習は、——「すべてを変える」

うずしおランチ代表

